

会話教材におけるローマ字表記 —英語／イタリア語の母語話者を事例として—¹

小林 ミナ・藤井 清美・柳田 直美

要 旨

本稿では、日本語教育の会話教材における、日本語の発音表示について考察する。

本稿の主張は、次の2点である。【1】日本語教科書でローマ字表記を用いる際には、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」のどちらであるかを峻別するべきである。【2】会話教材におけるローマ字表記、すなわち「音として理解、産出するためのローマ字表記」は、学習者の母語を考慮し、母語ごとに開発される必要がある。

そのための基礎調査として、英語とイタリア語を母語とする上級日本語学習者に、それぞれの母語を考慮したローマ字表記の作成を依頼し、「そのように表記した理由」「迷ったところ」「難しかったところ」などについてインタビューを行った。

その結果、英語とイタリア語の「音として産出するためのローマ字表記」は、多くの点で異なるものとなることが示された。

キーワード

音としての理解・産出 文字としての出力 初級 母語 国際音声字母 (IPA)

1. はじめに

本稿では、日本語教育の会話教材において、どのようなローマ字表記が用いられるべきかを考察する。本稿の主張を先取りして述べるなら、それは次の2点である。

- 【主張1】日本語教科書でローマ字表記を用いる際には、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」のどちらであるかを、峻別するべきである。
- 【主張2】会話教材におけるローマ字表記、すなわち、日本語を「音として理解、産出するためのローマ字表記」は、学習者の母語を考慮し、母語ごとに開発されるべきである。

本稿では、なぜこの2点を主張するのか、まずその理論的根拠を示す。そして、英語とイタリア語の母語話者を対象に行った、「音として理解、産出するためのローマ字表記」に関する基礎調査の結果を提示し、この主張を実証的に裏づけたい。

本稿の構成は、次の通りである。2.では、日本語、および、日本語教育におけるローマ字表記の使用の現状を概観する。3.では、そのような現状が抱える問題点を指摘し、本稿の目的を述べる。4.では本稿で行った基礎調査の概要を記し、5.ではそこで得られた結果を分析、考察する。

2. 日本語とローマ字表記

この2.では、日本語、および、日本語教育におけるローマ字表記の使用の現状を概観する。2.1では、日本語の表記体系におけるローマ字の使用を確認する。2.2で日本語教科書におけるローマ字表記の現状を見たのちに、2.3ではその役割を考える。

2.1 日本語の表記体系におけるローマ字

日本語の表記は、(1)、(2)のように、ひらがな、かたかな、漢字の3種類の文字を使い分けるのが一般的である。

- (1) 警護の関係上、会場に選ばれるのはホテルやデパートの迎賓館など。(『週刊朝日』2001年5月4-11日合併号(第106巻第21号、通巻4439号)、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」によるデータ。以下、「BCCWJ」)
- (2) ボールを持った目の前の敵を一発のタックルで確実に倒すことは、ラグビー選手にとって必須の条件である。(龍村仁『地球をつつむ風のように』サンマーク出版、「BCCWJ」)

ローマ字が使われるのは、次のように、外来語の一部、略号、固有名詞などに限られる(下線は筆者)。

- (3) 神谷さんは眼を見開き、そう答えた僕のTシャツのデザインを凝視してから、僕の顔に視線を移し、深く頷いて「読めよ」と言った。(又吉直樹『火花』文春 E-BOOK、No. 131)
- (4) ここで、労働省「雇用動向調査」により、三大圏から地方圏へのUターンの状況を50~52年の累計と56~58年の累計の比較によりみることにしよう。(『中小企業白書』昭和60年版、「BCCWJ」)
- (5) 第2回会合は、平成4年12月、パリ OECD本部において開催された。(『厚生白書』平成5年版、「BCCWJ」)
- (6) 一方、構造的には対極に位置する SONY は、創業世代なき後、「世界市場において通用するガバナンス」を模索している。(『経営学を創り上げた思想』生田泰亮(著)、「BCCWJ」)

次のように、すべてをローマ字で表記するのは、日本語としては一般的でない。

- (7) keigo no kankeijoo, kaijoo ni erabareru no wa hoteru ya depaato no geihinkan nado. (「警護の関係上、会場に選ばれるのはホテルやデパートの迎賓館など。)=(1))
- (8) booru o motta menomae no teki o ippatsu no takkuru de kakujitsu ni taosu koto wa ragubiisenshu ni totte hissu no joo ken de aru. (「ボールを持った目の前の敵を一発のタックルで確実に倒すことは、ラグビー選手にとって必須の条件である。)=(2))

このように、日本語においてローマ字は、外来語表記の一部や略号として組み込まれることはあっても、主たる表記体系として用いられることはない。

2.2 日本語教科書におけるローマ字表記

この2.2では、日本語教科書におけるローマ字表記の現状を見る。

日本語教科書では、日本語がすべてローマ字によって表記、提示されることがある。次の(9)と(10)は、現在、国内外で広く使用されている日本語教科書である。どちらも、学習者が使用する冊子において、ローマ字表記が使われている。なお、どちらも、訓令式ではなく、ヘボン式が用いられている。

- (9) Mirā-san wa IMC no shain desu.

Karina-san wa Fuji-daigaku no gakusei desu.

(スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級 I 本冊 ローマ字版』
スリーエーネットワーク、p.8、以下『みんなの日本語ローマ字版』)

- (10) ジョイ： たべものは なにが すきですか。

たなか： 肉が すきです。魚も すきです。

ジョイ： やさいは？

たなか： やさいは すきじゃないです。

ジョイ： わたしは 肉と やさいが すきです。

Joi: Tabemono wa nani ga suki desu ka.

Tanaka: Niku ga suki desu. Sakana mo suki desu.

Joi: Yasai wa?

Tanaka: Yasai wa sukijanai desu.

Joi: Watashi wa niku to yasai ga suki desu.

(国際交流基金(2013)『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 りかい』三修社、p. 54、
以下、『まるごと』)

(9)は、『みんなの日本語ローマ字版』からの引用である。ローマ字版は、「ひらがな、かたかなが読めない学習者」のために作成されている(『みんなの日本語初級 Q&A』(<http://www.3anet.co.jp/ja/1959/>))。

(10)は、『まるごと』の「モデル会話」からの引用である。「モデル会話」は「音声を開

きながら黙読し、会話と文法を結びつけて理解」(『まるごと』p.7)することを目的としている。

2.3 日本語教科書のローマ字表記の役割

2.2 で見たように、日本語教科書において、日本語がすべてローマ字によって表記されるのは、決して珍しいことではない。

では、日本語教科書において、ローマ字表記はどのような役割を担っているのだろうか。

まず考えられるのは、「ローマ字表記によって、文字の負担が軽減され、音声に集中できる」ことである。

たとえば『初級日本語 げんき I [第2版]』には、次のような記述がある。

- (11) 「「会話・文法編」「あいさつ」と第1課、第2課は、学習者の負担を軽減し自習を容易にするため、ひらがな・カタカナ表記とし、ローマ字を併記しました。」

(坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011)『初級日本語 げんき I [第2版]』The Japan Times、p.16)

この場合のローマ字表記は、文字よりも音が優先される。

たとえば次の(12)(13)で、ひらがな「は」「へ」に対して、助詞の場合とそうでない場合(いずれも一重下線)では、それぞれ異なるローマ字表記があてられている。長音(いずれも二重下線)の「う」には、「u」ではなく「o」があてられている。これは、日本語を「文字」ではなく「音」としてとらえ、置き換えているためである。

- (12) おはよございます ohayoo gozaimasu

こんにちは konnichiwa

こんばんは konbanwa

ありがとう arigatoo

(『まるごと』p.27)

- (13) ② 明日はわ日本語の授業がありませんから、東京へいきます。

Ashita wa Nihongo no jugyoo ga arimasen kara, Tookyoo e ikimasu.

- ④ A: すみません。このへんに電話がありますか。

Sumimasen. Kono hen ni denwa ga arimasu ka.

B: ええ、2階にあります。エレベーターのすぐ前ですから。

Ee, ni-kai ni arimasu. Erebeetaa no sugu mae desu kara.

(筑波ランゲージグループ(1991)『Situational Functional Japanese Volume One: Notes』

(初版)凡人社、p.88)

また、次の(14)では、「先生(せんせい)」「経済(けいざい)」のエ段長母音について、「sensee」「Keezai」のように、「i」ではなく「e」があてられている。

- (14) Student: 木村先生のご専門は。 Kimura-sensee no gosenmon wa.
 Professor K: コンピュータです。 Konpyuuta desu.
 Student: 田中先生のご専門は。 Tanaka-sensee no gosenmon wa.
 Professor K: 経済です。 Keezai desu.

(筑波ランゲージグループ(1991)『Situational Functional Japanese Volume One: Notes』
 (初版)凡人社、p.17)

このように、漢字に対するローマ字表記も、日本語を「音」としてとらえ、置き換えたものであることがわかる。

日本語の特徴として、使用する文字種が多い（ひらがな、かたかな、漢字の3種類を使い分ける）ことが指摘されることがある（城生・松崎 1995）。日本語のこのような特徴も、「ローマ字表記によって、文字の負担が軽減され、音声に集中できる」という役割の必要性を高めているのであろう。

ローマ字表記の役割として、もう1つ考えられるのは、「ひらがな（あるいは、かたかな）をローマ字に置き換えることによって、日本語の表記体系の理解を助ける」という点である。

初級の日本語教科書では、表1のような、ひらがな（あるいは、かたかな）の一覧表が示されることがある。

ひらがな（あるいは、かたかな）の体系を、ローマ字によって母音（横列）と子音（縦列）に開いて示した、このような一覧表は「ローマ字表記によって、表記体系の理解を助ける」ことを企図したものだろう。またこの一覧表は、一見、音韻体系の提示にも見える。しかし、現代共通語では音としては同一の「お」と「を」に、それぞれ異なるローマ字表記「o」と「wo」が与えられていることから、音韻体系の提示ではないことがわかる。ひらがな（あるいは、かたかな）を「音」ではなく「文字」としてとらえ、置き換えているからである。

表1 ローマ字を用いたひらがな一覧表

	a	i	u	e	o
--	あ	い	う	え	お
k	か	き	く	け	こ
s	さ	し	す	せ	そ
t	た	ち	つ	て	と
n	な	に	ぬ	ね	の
h	は	ひ	ふ	へ	ほ
m	ま	み	む	め	も
y	や	--	ゆ	--	よ
r	ら	り	る	れ	ろ
w	わ	--	--	--	を

以上、2.3では、日本語教科書で用いられるローマ字表記の役割について、「ローマ字表記によって、文字の負担が軽減され、音声に集中できる」、「ローマ字表記によって、表記体系の理解を助ける」という2つを指摘した。

2.4 まとめ

2.では、日本語、および、日本語教育におけるローマ字表記の現状を概観した。そして、日本語教科書において、日本語がすべてローマ字によって表記されるのは、決して珍しいこと。その場合は、訓令式ではなくヘボン式が用いられていること。また、日本語教科書のローマ字表記が、「ローマ字表記によって、文字の負担が軽減され、音声に集中できる」、「ひらがな（あるいは、かたかな）をローマ字に置き換えることによって、日本語の表記体系の理解を助ける」という2つの役割を担っていること。以上の3点を指摘した。

3. 問題の所在

3.では、本稿の背景にある問題意識、および、研究目的を述べる。

2.で概観した、日本語、および、日本語教育におけるローマ字表記の現状については、日本語教育の観点から、少なくとも次の2つの問題点が指摘できる。

1つ目は、そのローマ字表記が「音として理解、産出すること」を目的としているのか、「文字として出力すること」を目的としているのかが、峻別されていないということである。

2つ目は、「音として理解、産出すること」を目的としている場合、そのローマ字表記が、学習者が日本語を「音として理解、産出すること」に本当に役に立っているのかが明らかではないということである。

以下、この2つの問題点について順に考えたい。

3.1 教育目的に応じたローマ字表記

本稿において、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」が峻別されていないことを問題点とするのは、どちらを目的とするかによって、「適切なローマ字表記」および「学習者が学ぶべき事柄の全体像」の2つが大きく異なるからである。

「音として理解、産出すること」というのは、2.で述べてきた、「日本語を「音」としてとらえる」ということであり、音声コミュニケーションの教育に関わる。「文字として出力すること」というのは、「日本語を「文字」としてとらえる」ということであり、文字コミュニケーションの教育に関わる。

もちろん2.で見てきたように、日本語教科書には、ひらがなの「を」を「o」と「wo」のどちらのローマ字表記で表記するかといった違いがあった。しかし、音声コミュニケーション、文字コミュニケーションそれぞれについて、教育の全体像をきちんと考えていくと、このような対応だけでは不十分であることが指摘できる。

3.2 「音として理解、産出すること」を目的とするローマ字表記

まず、日本語を「音として理解、産出すること」を目的とする、音声コミュニケーション教育におけるローマ字表記について考える。

「音として理解、産出すること」を目的とするローマ字表記というのは、繰り返しになるが (15)・(17) のようなものである。下線部に注目されたい。

(15) korewa hasami desu.

(これは は はさみ です)

(16) heyae hairu.

(へやへ はいる)

(17) origamio oru.

(おりがみを おる)

(15)には、助詞「は」と「はさみ」の1拍目の2箇所、ひらがなの「は」がある。「日本語を「音」としてとらえる」場合には、助詞「は」は「wa」、「はさみ」の1拍目は「ha」と表記される。(16)も同様で、助詞「へ」と「へや」の1拍目は、どちらもひらがなの「へ」であるが、助詞「へ」は「e」、「へや」の1拍目は「he」と表記される。一方、(17)には、助詞「を」と「おりがみ」「おる」の1拍目は、ひらがなでは「を」と「お」と異なっているが、どちらも「o」と表記される。

これは、日本語を「音」としてとらえているからである。

3.3 「文字として出力すること」を目的とするローマ字表記

次に、日本語を「文字として出力すること」を目的とする、文字コミュニケーション教育におけるローマ字表記について考える。

2.3 で、ローマ字による母音と子音の組み合わせによる、ひらがな（あるいは、かたかな）の一覧表を示した。あのような一覧表は、日本語の文字体系を理解するには、たしかに有用にも思える。しかし、多くの日本語学習者にとって、文字コミュニケーションを学習することの最終ゴールは、日本語の文字体系に関する知識を得ることではなく、文字を用いて、自らのコミュニケーションが十全に行えるようになることである。

では、文字コミュニケーションにおいて、たとえば、ひらがなの「か」を「k」と「a」という2つのローマ字に分解して理解することが必要なのは、いったいどのような場面なのだろうか。筆者は、その一例として「パソコンなどを使って、日本語を「打つ」場面」をあげる。つまり、本稿でいう「文字として出力するためのローマ字表記」とは、キーボードやタッチパネルで「ローマ字入力方式」を用いて日本語を表示させる際のタイピング方法を指している。

たとえば、3.2 で(15)・(17)としてあげた例文を、「文字として出力するためのローマ字表記」にしてみる。すると、(18)・(20)のようになる。なお、これ以降、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と区別するために、「文字として出力するためのローマ字表記」は大文字で記す。

- (18) KOREHA HASAMI DESU
 (これは はさみ です)
- (19) HEYAHE HAIRU.
 (へやへ はいる)
- (20) ORIGAMIWO ORU
 (おりがみを おる)

「文字として出力するためのローマ字表記」では、音は考慮されない。「HA」という入力を、「は」という文字と対応させているだけである。さらに厳密に言えば、「HA」という入力に対応しているのは、「ハ」「歯」「葉」「母(の1拍目と2拍目)」「貼り(の1拍目)」「私は(の4拍目)」といった、さまざまな変換候補である。(18)(19)のように、「は」「へ」を出力させたいのであれば、助詞であっても自立語の一部分であっても、同じように「HA」「HE」と入力すればよい。他方、(20)のように、「を」「お」という異なる文字を出力させたいのであれば、「音」としては同一であっても「WO」「O」という異なる入力を用いなければならない。

その上で、正しい最終出力を得るには、単に「は」は、「H」と「A」である」という対応を覚えるだけでは不十分である。入力するプロセスにおいて「どこで区切ってスペースキーを押せば、適切な文字表記が効率よく得られるか」といったことも知らなければならない。

また、「文字として出力するためのローマ字表記」というのは、日本語表記との対応なので、外来語における原綴りとも対応しない。たとえば、「チョコレート」「パーティー」「フィリピン」の3語を、英語の原綴りのままで[ローマ字入力]すると、次のような[出力]となる(以下は、ATOKを使用した変換例)。

- (21) [英語原綴り] chocolate
 [ローマ字入力] CHOCOLATE
 ↓かな漢字変換
 [出力] ちょcおあて
- (22) [英語原綴り] party
 [ローマ字入力] PARTY
 ↓かな漢字変換
 [出力] ぱ r t y
- (23) [英語原綴り] philippine
 [ローマ字入力] PHILIPPINE
 ↓かな漢字変換
 [出力] p ひっいっぴね

さらに、最近の「ローマ字入力方式」および「かな漢字変換」に伴う変換プログラムについては、さまざまな理論、アルゴリズムが取りこまれている。ある変換プログラム(ATOK

2015 for Mac)では、(24)・(26)のような[ローマ字入力]に対して、それぞれ次のような複数の[出力候補] (変換候補) が、デフォルトとして表示されるようになっている。

(24) [ローマ字入力] CHOKORE-TO

↓かな漢字変換

[出力候補] チョコレート、chocolate、CHOCOLATE、チョコレートケーキ

(25) [ローマ字入力] PA-TEXI-

↓かな漢字変換

[出力候補] パーティー、party、PARTY

(26) [ローマ字入力] FIRIPINN

↓かな漢字変換

[出力候補] フィリピン、比律賓、Philippines、PHILIPPINE、フィリピン人

したがって、外来語については、原語の綴りではなく日本語での綴りを介して、入力と出力の対応を理解する必要があるのである。

このように、「文字として出力するためのローマ字表記」は、単に「「は」は、「H」と「A」である」という対応だけではなく、スペースキーを押すタイミング、表示された複数の出力候補から目指す表記を探す能力、日本語での外来語表記に関する知識、といったものまでを含む総体の中に位置づけられる必要がある。

3.2 と 3.3 の議論から明らかなのは、一口に「ローマ字表記」と言っても、「音として理解、産出するためのローマ字表記」か「文字として出力するためのローマ字表記」かによって、「適切なローマ字表記」および「学習者が学ぶべき事柄の全体像」の 2 つが大きく異なるということである。

以上が本稿において、下記を主張することの根拠である。

- 【主張 1】 日本語教科書でローマ字表記を用いる際には、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」のどちらであるかを、峻別するべきである。

3.4 日本語の発音を表記する方法

ここまでの議論を踏まえて、3.4 では、日本語の音声を表記する方法について考える。これは、「聞く」「話す」という音声コミュニケーションの教育に大きく関わるものである。

音声コミュニケーションの教育においては、文字を介さず、音声だけを媒体とする方法も、もちろん可能である。しかし、文字媒体がないことを不安に思う学習者もいるし、教材などに表記しなければいけないこともある。それを考えると、何らかの表記手段があったほうがよい。ただし、そこに日本語の正書法や表記体系が介在する必然性はない。たとえば、学習者が自らのノートに「おはようございます」「おあよ:ございまs」などと記していたとしても、本人の中でその表記が「おはようございます」という音声産出と結びついているのであれば、音声コミュニケーションの観点からは、それを問題にする必要はない。

また、音声の表記手段といっても、専門知識が必要とされる IPA（国際音声字母）などを学習者に提示するのも、まったく現実的ではない。

筆者らは、母語でローマ字（アルファベット）を用いる学習者にとっては、ローマ字を用いるのが、もっとも現実的で最適だと考える。なぜなら、少なくとも母語において、すでにローマ字（アルファベット）は認識しているからである。そして、そのローマ字表記は、学習者が日本語を「音として理解、産出すること」に役立つことに特化したものであるべきである。なお、「音として理解、産出すること」を目的とする場合でも、「理解」と「産出」で適切なローマ字表記が異なる可能性もある（もしかしたら、異なるかもしれない）。そこで以下では、「産出」に焦点を絞って、話を進めることにする。

2.2 で見たように、日本語教科書ではヘボン式のローマ字表記が用いられていた。ヘボン式については、その成立経緯により、英語との親和性が高いことが知られている。しかし、基本的に文字レベルの対応であるため、たとえ英語を母語とする学習者であっても、単語、文節、文といったレベルになると、必ずしも理解が容易でないことが予想できる。なぜなら、たとえば「mite」「take」というローマ字表記と結びつく音は、日本語母語話者にとっては/ミテ/、/タケ/であるが、英語母語話者には/マイト/、/テイク/だからである。

さらに、英語との親和性が高いことは、英語以外を母語とする学習者の理解について疑念が生じる。たとえば、「chiesa」「oggi」というローマ字表記と結びつく音は、日本語母語話者には/チエサ/、/オッジ/であるが、イタリア語母語話者には/キエザ/、/オッジ/だからである。

このように、日本語を「音として産出するためのローマ字表記」については、ヘボン式をベースに「o」と「wo」を入れ替えるといった対応ではなく、学習者の母語を最大限に考慮して、母語ごとに開発される必要がある。

以上が本稿において、下記を主張することの根拠である。

【主張 2】 会話教材におけるローマ字表記、すなわち、日本語を「音として理解、産出するためのローマ字表記」は、学習者の母語を考慮し、母語ごとに開発されるべきである。

3.5 まとめ

3. では、日本語教科書のローマ字表記の現状の問題点を指摘し、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」を峻別することの必要性を述べた。そして、「音として理解、産出するためのローマ字表記」については、学習者の母語を最大限に考慮して、母語ごとに開発される必要があることを主張した。

4. 調査の概要

3. までの議論を踏まえて、学習者の母語を最大限に考慮した「音として産出するためのローマ字表記」を開発するための基礎調査を行った。この基礎調査は、本稿における 2 つ

の主張を実証的に裏づけようとするものである。

この4.では、調査の概要について述べる。

4.1 目的

調査の目的は、次の2つである。

- (27) 「音として産出するためのローマ字表記」が、母語によって異なるかどうかを明らかにする。
- (28) 学習者の母語を最大限に考慮した「音として産出するためのローマ字表記」の特徴を、母語ごとに明らかにする。

4.2 協力者

英語、イタリア語それぞれの母語話者各1名（以下、それぞれ「協力者E」「協力者I」とする）に協力を依頼した。協力者E、Iの日本語レベルについて、定量的な測定は行っていないが、2名とも日常会話のみならず、仕事での複雑なやりとりもすべて日本語でこなすことができ、また、日本語と母語のどちらに関しても言語学的知識を十分に持っている。

今回の調査にあたり、英語とイタリア語を選んだ理由は、次の通りである。英語とイタリア語は、どちらも表記にローマ字（アルファベット）が用いられる。よって、英語とイタリア語の母語話者は、ローマ字自体の認識には支障がない。言語類型論的には、どちらもインド・ヨーロッパ語族に属し、英語はゲルマン系、イタリア語はロマンス系の言語ではあるが、文法的には多くの共通点を持つ。音声的には、強弱アクセントという共通点はあるが、音節構造については、英語は閉音節、イタリア語は開音節を基本とする。なお、日本語も開音節が基本である。

以上のことから、英語とイタリア語を取りあげることは、「音として産出するためのローマ字表記」について、母語による異なりを観察するのに適当であると判断した。

4.3 方法

協力者E、Iに12組の日本語表現（後述）を、それらの表現が用いられる状況説明と共に示した。あわせて、東京方言を母語とする日本語話者のモデル音声も提示した。その上で、「12組の日本語表現について、日本語の知識をまったく持たない英語／イタリア語の母語話者にとって、母語の感覚で発音することが容易で、かつ、日本語らしく聞こえるようなローマ字表記を作成してほしい。その際、既存のローマ字表記や日本語の正書法などは、まったく考慮しなくて良い」と依頼した。これによって得られたデータを<表記データ>とする。

その後、協力者が作成した<表記データ>について、「なぜそのように表記したのか」「表記にあたって迷ったところ、難しかったところはどこか」などについて、協力者に自由に語ってもらった。これによって得られたデータを<プロトコルデータ>とする。

なお、英語とイタリア語の調査は、異なる日時、場所において実施されたものであり、協力者E、Iは、お互いがどのような<表記データ>を作成したかは、まったく知らない。

4.4 調査に用いた状況と表現

調査に用いた状況と表現を表2として示す。右欄にゴシック体で示しているのが、ローマ字表記の対象となる日本語表現である。⁴

表2 調査に用いた状況と日本語表現

	状 況	日 本 語 表 現
1	飲食店の入口で、中にいる店員に尋ねる。	すみません、ここって無料のWifiありますか。
2	飲食店の会計時に、店員に頼む。	別々でお願いします。
3	買い物の会計時に、店員にクレジットカードを見せながら尋ねる。	あの一、これ使えますか。
4	クレジットカードで支払おうとして、店員に「ご一括ですか、分割ですか」と尋ねられたときに答える。	一括で。
5	コンビニで弁当を買ったときに、店員に頼む。	これ温めてもらえますか。
6	子どもの運動会を見に行き、顔見知りの保護者に話しかける。	雨が降らなくて良かったですね。
7	子どもの運動会を見に行き、隣席で、隣にいる同級生の母親に話しかける。	みんな同じ格好だから、子どもがどこにいるかわからないですよ。
8	学会で自分の口頭発表に対する質問が出たが、少し考える時間を稼ぎたいので最初に言う。	ご質問ありがとうございます。
9	学会で自分の口頭発表に対する質問に答えたが、質問者が納得したかどうか自信がないので、このように言って答えを終える。	お答えになっていますでしょうか。
10	学会で自分の口頭発表に対してコメントが出たが、いまは何も答えることができないので、簡潔に答えて質疑応答を終えたい。	ありがとうございます。今後の課題とさせていただきます。
11	友だちに「いまロードショーで評判の映画を見たか」と聞かれて、答える。	見た、見た。
12	友だちに「いまロードショーで評判の映画を見たか」と聞かれて、見たことを伝えたあとに続ける。	いま、記録更新中なんですよ。

4.6 まとめ

以上、この4.では、学習者の母語を最大限に考慮した「音として産出するためのローマ字表記」を開発するために、本稿で行った基礎調査について、その概要を述べた。

5. 分析と考察

この5.では、基礎調査で得られた結果を提示し、その意味するところを考察する。

5.1 調査で得られた<表記データ>

調査で得られた<表記データ>を、(29)として示す。それぞれ上から「日本語表記」「英語

母語話者のためのローマ字表記」(=[英])、「イタリア語母語話者のためのローマ字表記」(=[イ])の順になっている。対応箇所を参照しやすいよう、適宜、改行、スペースを入れた。

(29) 調査で得られたく表記データ

1	すみません	ここって	無料の	Wifi	ありますか
	[英]Soo mēmah sen	kōh-koh tay	moolrōh nōh	“wifi”	ahlree mahs kah?
	[イ]Sumimasèn,	cocotte	muriòo no	wifi	arimascà?
2	別々で	お願いします。			
	[英]Behtsoo-behtsoo-day	ohnay-guy-shē-mahs			
	[イ]Betsù betsù de	onegai scimàs.			
3	あの一	これ	使えますか		
	[英]Ah-nōh	kōhlay	tskah-eh-mahs-kah?		
	[イ]Anòoo,	core	tsucaemasca?		
4	一括で				
	[英]Iy’Kahtsoo-day				
	[イ]Iccàtsu de.				
5	これ	温めて	もらえますか		
	[英]Kohlay,	ah-tah-tah-meh-tay	mōh-lrah-eh mahs-kah?		
	[イ]Corè	atatametè	moraemasca?		
6	雨が	降らなくて	良かった	ですね	
	[英]Ah-meh gah	fiulra-nah-koo-tay,	yokah-tah	dehs-nay	
	[イ]Ame ga	furanactè	iocatta	desnè.	
7	みんな	同じ	格好だから	子どもが	
	[英]Meen-nah	ōhnah-jee	kah’kōh dah-kah-lrah	kōh-dōh-moe gah	
	[イ]Minna	onnagi	caccòo dàcarà	codomo ga	
	どこに	いるか	わからない	ですよ	
	[英]dōh-kōh nee	iyrlh-kah	wah-kah-lrah-nye	dehs-ney!	
	[イ]doco ni	iru cà	uacarnai	desionè!	
8	ご質問	ありがとうございます			
	[英]Gōh-sheetsoo-mōhn	ahlree-gah-tōh-gōh-zai-ee-mahs.			
	[イ]Goscitsumòn	arìgatòo gozaimàs.			
9	お答えに	なっています	でしょうか		
	[英]Ohkoh-taheh nee	nah’the-eemahs	deh-show kah		
	[イ]Ocotàe ni	natte imas	desciòca.		
10	ありがとうございます。		今後の	課題と	
	[英]ahlree-gah-tōh-gōh-zai-ee-mahs.		Kōhng-gōh nōh	kah-dye tōh	
	[イ]Arìgatòo gozaimàs.		congo no	cadai to	
	させて	いただきます			
	[英]sah-she-tey	iy-tah dah-kee-mahs			
	[イ]sasete	itadàchimàs.			
11	見た	見た			

	[英] Mē'tah	mē'tah / Mee'tah mee'tah	
	[イ] Mità	mità.	
12	いま	記録	更新中なんですよ
	[英] Iy mah,	kee-lrōh-koo	kōh-sheen-chew-nahn deh-show?
	[イ] Ima	chiròc	coscinciùu nandesciòo.

なお、この<表記データ>については、日本語の学習経験や知識をまったく持たない英語母語話者／イタリア語母語話者各1名に見せ、それぞれ「母語の感覚で自由に発話」してもらい、日本語の音声表現として十分に認識可能であることを確認済みである。このことについては、最後の「6.おわりに」で再び触れる。

以下では、この<表記データ>を軸に、適宜、<プロトコルデータ>を引用しつつ議論を進める。

5.2 子音の対応

まず、子音の対応に注目する。[英]と[イ]では、次のように多くの共通点があった。

(30) サ行の子音には「s」を用いる

10. させて いただきます
 [英] sah-she-tey iy-tah dah-kee-mahs
 [イ] sasete itadàschimàs.

(31) タ行の子音には「t」を用いる

5. あたためて
 [英] ah-tah-tah-meh-tay
 [イ] atatametè

(32) マ行の子音には「m」を用いる

7. みんな
 [英] Meen-nah
 [イ] Minna
 12. いま
 [英] Iy mah
 [イ] Ima

しかし、すべての子音の対応が共通しているわけではない。カ行については、[英]では「k」、[イ]では「c」が用いられている。

(33) カ行の子音には、[英]は「k」、[イ]は「c」を用いる

1. ここつて
 [英] kōh-koh tay
 [イ] cocotte
 7. かつこうだから
 [英] kah-kōh dah-kah-lrah

[イ] caccò dàgarà

[イ] で「c」を用いるのは、「現代イタリア語では「k」という文字は使わないから」<プロトコルデータ>である。ただし、現代イタリア語において、「c」と「ch」は同じ音価を持ち、どちらの表記になるかは後続する母音によって決まる。そのため、「[イ]」の「か、き、く、け、こ」は、次のように表記される」<プロトコルデータ>ことになる。

(34) 「か」ca、「き」chi、「く」c、「け」che、「こ」co

また、「ジ」については、[英] では「j」が、[イ] では「g」が用いられている。

(35) 「ジ」には、[英] は「j」、[イ] は「g」を用いる

7. おなじ

[英] ōhnah-jee

[イ] onnagi

その他、注目すべき子音として、[英]における「lr」がある。これは、協力者Eによって新たに作られた表記で、「l」と「r」を組み合わせたものである。協力者Eは「「ありますか」の「り」、「これ」の「れ」などの音は英語にないので、どの子音を用いればよいか難しい」<プロトコルデータ>とし、その結果、「lr」という子音を新たに作成するに至った。

以上、5.2 では、子音の対応に注目した。[英]と[イ]の子音の対応には、多くの共通点が見られるものの、完全に一致しているわけではないことがわかった。

5.3 母音の対応

次に、母音に注目する。[英]と[イ]には、子音の対応には多くの共通点が見られたが、母音の対応については、ほとんど共通点が見られない。

[英]における母音の表記について、協力者Eは、たとえば次のように述べている（いずれも<プロトコルデータ>より）。

(36) (8. 「ご質問」の「ご」を「go」にすると) [gou]と読んでしまう。だから、「goh」にするのがよい。

(37) (8. 「ありがとうございます」の「ざい」は、実際は「ざ」と「い」の間に短い分かれ目 (slight split) がある。だから「zai」とするより「zai-ee」のようにしたほうがよい。

(38) (9. 「お答えになっていますでしょうか」の「ています」は) 「tey-ee」か「teh-ee」がよいと思うが、どちらにするか悩む。

その結果、最終的に得られた [英]における母音の表記には、次のような対応が見られた。

(39) ア段の母音には「h」を付加する

1. ありますか
[英] ahree mahs kah?
5. あたためて
[英] ah-tah -tah-meh-tay
- (40) イ段の母音は「ee」と表記する
7. みんな おなじ
[英] Meen-nah òhnah-jee
9. おこたえに なっています
[英] Ohkoh-taheh nee nah'the-eemahs
- (41) エ段の母音は「ay」と表記する
1. ここつて
[英] koh-koh tay
4. いっかつで
[英] ly'kahtsuoo-day
- (42) エ段の母音に「h」を付加する
5. あためて
[英] ah-tah -tah-meh-tay
9. でしょうか
[英] deh-show kah
- (43) オ段の母音に「e」を付加する
7. こどもが
[英] koh-doh-moggah
- (44) オ段の母音に「h」を付加する
2. お願いします
[英] ohnay-guy-shē-mahs
10. こんごの
[英] kohng-goh noh

一方、[イ]における母音の対応は、次のようになっている。

- (45) ア段の母音は「a」と表記する
10. させて いただきます
[イ] sasete itadachimàs.
- (46) イ段の母音は「i」と表記する
1. ありますか
[イ] arimasà?
7. みんな おなじ
[イ] Minna onnagi
- (47) ウ段の母音「u」と表記する
1. すみません
[イ] Sumimasèn

(48) エ段の母音「e」と表記する

3. これ 使えますか
 [イ] core tsucagmascà?

(49) オ段の母音「o」と表記する

7. こどもが どこにいるか
 [イ] Codomo ga doco ni iru cà

4.2 で述べたように、英語は閉音節、イタリア語と日本語は開音節を基本とする。日本語の母音の表記方法が、[イ]よりも[英]のほうが複雑なのは、この点からもうなずける。

また、[イ]の母音の対応は、ヘボン式による日本語のローマ字表記と一致している。英語との親和性が高いとされるヘボン式表記が、母音に関しては[英]ではなく[イ]と一致している点は興味深い。

以上、5.3では、母音の対応に注目した。

5.4 英単語による代替

その他、注目すべきものとしては、[英]における「英単語による代替」がある。たとえば次のようなものである。

(50) 「guy」による代替

2. おねがいします
 [英] ohnay-guy-shē-mahs

(51) 「dye」による代替

10. かだいと
 [英] kah-dye tōh

(52) 「show」による代替

12. 更新中なんでしょ
 [英] kōh-sheen-chew-nahn deh-show?

このような「英単語による代替」が、英語母語話者にとって役に立つものであるなら、「音として産出するためのローマ字表記」は、日本語のモーラを単位として考えるだけでは不十分であることを示唆している。

5.5 「文字として出力するためのローマ字表記」

次に、「音として産出するためのローマ字表記」である[英]と[イ]を、「文字として出力するためのローマ字表記」(=[文])と比べてみる。たとえば、次のようになる。

- (53) 2. 別々で お願いします。
 [英] Behtsoo-behtsoo-day ohnay-guy-shē-mahs
 [イ] Betsù betsù de onegai scimàs.
 [文] betsu betsu de onegai shimasu

(54) 12.	いま	記録	更新中なんですよ。
	[英] Iy mah,	kee-lrōh-koo	kōh-sheen-chew-nahn deh-show?
	[イ] Ima	chiròc	coscinciùu nandesciò.
	[文] ima	kiroku	koushinchuunandesho

[英]より[イ]のほうが、やや[文]との共通点が多いという傾向はあるものの、どちらも[文]と完全に一致しているわけではない。よって、「音として産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」は峻別されるべきである。

5.6 まとめ

以上、この5.では、基礎調査で得られた<表記データ><プロトコルデータ>に基づき、その意味するところを考察した。

その結果、「音として産出するためのローマ字表記」である[英]と[イ]は、多くの点で異なっていた。また、[英]と[イ]は、「文字として出力するためのローマ字表記」([文])とも異なっていた。

ゆえに、本稿における次の2つの主張は、実証的にも裏づけられた。

【主張1】 日本語教科書でローマ字表記を用いる際には、「音として理解、産出するためのローマ字表記」と「文字として出力するためのローマ字表記」のどちらであるかを、峻別するべきである。

【主張2】 会話教材におけるローマ字表記、すなわち、日本語を「音として理解、産出するためのローマ字表記」は、学習者の母語を考慮し、母語ごとに開発されるべきである。

6. おわりに

本稿では、日本語教育の会話教材において、どのようなローマ字表記が用いられるべきかを考察した。そして、理論的に導き出された本稿における2つの主張について、基礎調査を実施することにより、実証的にも裏づけられることを明らかにした。

井上(2005)は、「文法説明は、日本語の感覚を学習者に理解させるのではなく、説明のしかたを学習者の母語の感覚に合わせる」(井上2005:83)ことの重要性を指摘している。これは文法教育、とくに語用論的側面に関わる指摘であるが、音声教育についても同様の指摘ができるだろう。音声教育では、母語への対応について、理論と実践の両面において、文法教育よりも豊富な蓄積がある。しかし、それらは「母語(あるいは母方言)ごとの誤用傾向の指摘」「母語ごとの説明や練習方法の提案」といったものが多く、「母語ごとの教材」については、さらなる開発が待たれる領域である。

今後の課題としては、本稿で得られた<表記データ>を踏まえて、学習者の母語を考慮した、母語ごとの「音として産出するためのローマ字表記」をさらに洗練させることがあげられる。

5.1でも述べたように、本稿で得られた<表記データ>は、日本語の学習経験、および、

知識をまったく持たない英語母語話者／イタリア語母語話者各 1 名に見せて、それぞれ「母語の感覚で自由に発話」してもらい、日本語の音声表現として十分に認識可能であることを確認した。今後は、定量的な調査を実施し、その結果をローマ字表記に反映させていく予定である。

また、上記の過程において、いくつか興味深いコメントが得られた。たとえば、「wifi」と書いてあると、「ウィーフィー」と読んでしまう。「Wi-Fi」あるいは「WIFI」のように書いてあれば、英語からの外来語である”Wi-Fi”であることがわかるので、「ワイファイ」という音と結びつきやすい「イタリアでは現在 60 歳以下であれば、小学校から英語が必修となっている。「c」ではなく「k」を用いても同じ音を連想するので、これはどちらでもよいのではないか」（いずれも、イタリア語話者）といったものである。そこで、定量的な調査だけではなく、定性的な調査も行い、コメントを集約することによって、よりローマ字表記の精度を高めていく予定である。

注

- 1 本研究は JSPS 科研費「コミュニケーションのための日本語ウェブ教材の作成と試用（基盤研究 A:21242012、研究代表者 小林ミナ）」「私らしく」産出できるようになるためのウェブ型日本語教材の開発（挑戦的萌芽研究:15K12899、研究代表者 小林ミナ）」の助成を受けている。なお、本稿において「筆者」とある場合には、本稿の著者 3 名を指す。「筆者ら」とある場合には、著者 3 名を含んだ上記 2 つの科研費プロジェクトの関係者を指す。
- 2 日本語では、どちらも無意味語となる。
- 3 イタリア語では、それぞれ「教会」「今日」の意味。
- 4 この 12 組の状況と表現は、日本語学習者に対するニーズ調査の過程で得られたものである。ニーズ調査の経緯と詳細については、ここでは触れない。

参考文献

- 井上優（2005）「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、83-102
- 小林ミナ・藤井清美・柳田直美（2014）「会話教材における発音表示」シドニー日本語教育国際研究大会（SYDNEY-ICJLE2014）（シドニー工科大学、オーストラリア）
- 小林ミナ・藤井清美・柳田直美（2015）「イタリア語話者のための会話教材における発音表示」（ポスター発表）第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（ボルドーモンテーニュ大学、フランス）
- 城生佰太郎・松崎寛（1995）『日本語「らしさ」の言語学』大修館書店
- 東京外国語大学語学研究所（編）（1998）『世界の言語ガイドブック 1（ヨーロッパ・アメリカ地域）』三省堂

（こばやし みな 早稲田大学大学院日本語教育研究科）
 （ふじい きよみ 金沢工業大学基礎教育学部）
 （やなぎだ なおみ 一橋大学国際教育センター）